

忠 岑

千鳥なく佐保の河霧立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く

(釋)○千鳥なく 千鳥の鳴くを、後世は、冬にのみ詠めど、古くは、秋、又は、春にも詠めり。○佐保 秋歌下、「佐保山の柞の紅葉」の條に云へり。○山の 佐保山のなり。

一首の意は、これまでにはや、千鳥の啼く佐保の川の霧が、きつと立ッたらしいワイ、それと知られて、この佐保山の木の葉も、段々色が増ッて行くワイとなり。

(評)紅葉の露時雨に色付く如くいふは、常の事ながら、霧にても濡るゝものなれば、一つの趣向なり。佐保の川原越しに、山の紅葉を畫ける圖様なるべし。霧は、繪のうへになき想像ならむ。風調者古なり。

拾遺集、六帖、忠岑集、家隆本に従ひて、忠岑の名を補ひつ。さて、拾遺集にも、家集にも、結句、色かはり行くとあり。眞淵曰く、賀の歌なれば、色かはるといふ詞を忌みて、後に、さかしらして、色まさると換へたるにもあるべし、といへれども、この集のは、素より、まさるとありければこそ、拾遺集には、今、一説の方に據りて、再び、采録えたりしなれ。まさるよりは、かはるの方宜しきにや。下句、六帖に、ま木の梢も色付きにけりとあるは、深山の景色にて、茲にかなはずと、景樹の云へるが如し。

○

秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみぢを風をかしける

(釋)○ときは山 夏部、秋部下に出でたり。○かしかる かしは借しなり。

一首の意は、秋が来ても、木の葉の色も變らぬ常磐山では、時節柄、紅葉の無いもいかいと云ふやうに、餘所の山の紅葉を、風がサ、吹いて来て、常磐木の梢へ吹掛けて、此の常磐山へ借したワイとなり。

(評)山の名に繼りての趣向は、秋部下にも、

もみぢせぬ常磐の山はふく風の音にや秋をさへ渡るらむ

などありて、平凡ながら、紅葉を風の借すといへる擬人、奇警ならむか。木立茂りたる青山のあたりに、紅葉を風の吹立てたらむ、繪様なるべし。

この歌、家隆本に署名なしとぞ。さては、前のと同じく、忠岑の作か。

冬

貫 之

あらゆきのふりしく時はみよし野の山下風にはなぞ散りける

(釋)○山下風 萬葉集には、これを、山のあらしと訓めり。されど、茲にては、山した風と訓むべきなり。もと、萬葉の訓み違へより起りて、一つの詞とはなれるものならし。

一首の意は、この三吉野の山へ、白い雪が頻に降る時には、山下の風で、麓に花がサ、意外に散ッたワイとなり。

(三六六)

(評)景樹、廣陰等が、芳野は花の名所なれば、雪を花と見立てしなりといへるは、いかゞ。奈良時代より、この集の頃かけては、上にも云へる如く、吉野には、雨雪、或は、山水の勝をこそ詠みたれ、櫻の花を賞する事は、をさく聞えぬをや。こは、冬部に、數多見えし趣向と同じき、譬喩なる事は、萬葉集卷十に、

山高みふりくる雪をうめの花散りかも來ると思ひつるかも

とある、先軌をたづねて心得べし。但、歩々踏襲えて、作者の物とえて見るべき無し。

拾遺集、家隆本、貫之集に従ひて、貫之の名を補ひつ。三句、六帖に あし引のとあり。

春宮のうまれ給へりける時にまゐりてよめる

典侍藤原よるかの朝臣

峰たかき春日の山にいづる日はくもる時なく照らすべらなり

(釋)春宮のうまれ給へりける時に 春宮は、醍醐天皇第二の皇子にて、保明親王と申し、御母は藤原基經の女中宮穩子なり。延喜三年降誕、同四年二月立太子ありしを、延長元年三月御病の爲めに、御齡二十一にて薨じ給ふ。文献彦と謚し奉る。○春日の山 大和國奈良にあり。其處に、藤原氏の祖神を祀れる由は、上の「春日野に若菜摘みつゝ」の條に云へり。

一首の意は、頂の高い春日の山に、さし出る日は、所柄、曇る時も無く、世の中を照らしさうな様子だワイ、と云へるは、その表面にて、實は、春日の神の御末の藤原氏の中でも、この上

もない、基經公の姫君の御腹に出來ましたる若宮様なれば、御行末、天子とお成り遊ばされて、何時までも、御仁徳の曇る時もなく、天下に御照臨遊ばしさうな様子で、御座りますワイの意なり。

(評)関関の高さを峰高きに、藤原氏出の皇子を春日の山にいづる日に擬へて、すべて、譬喩を以て、御行末を慶賀し奉れるが、巧なる事は、勿論、その語調の、逞しく力ある事、巾幗の作に類せず。

(三六七)

明治三十五年八月一日印刷
明治三十五年八月五日發行

全五冊

第二 定價金四拾錢

著者 金子元臣

東京市本郷區弓町二丁目十二番地

發行者 三樹一平

東京市神田區錦町二丁目十番地

印刷者 三島宇一郎

東京市神田區表神保町二番地

印刷所 弘文堂

同所 (電話本局三三二六番)

不許複製

發行所

東京市神田區錦町二丁目
(特電話本局二四三八)

明治書院

187
159

金子元臣先生著 訂正再版

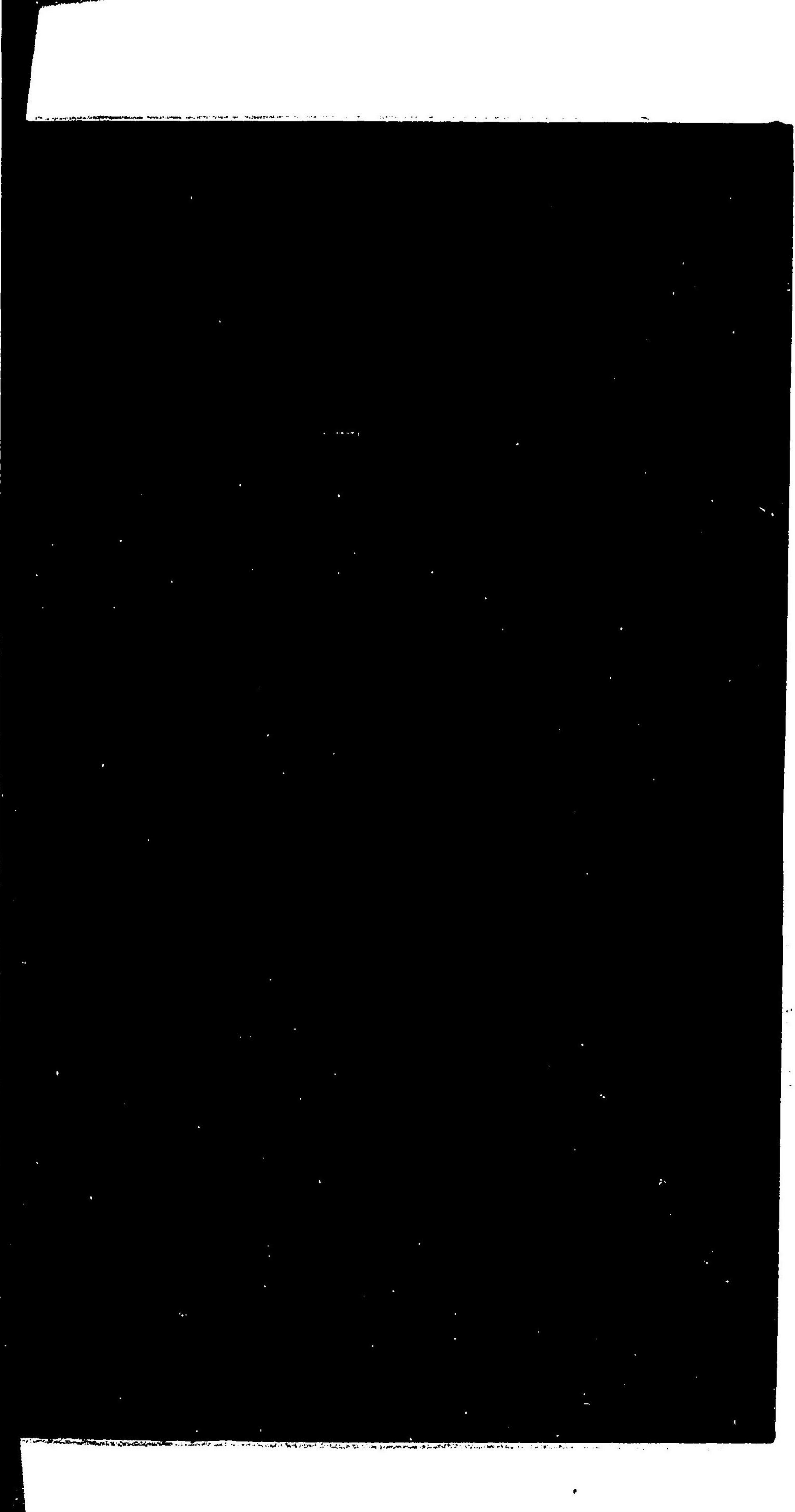
○歌がたり

クロース製全一冊

定價金三拾五錢 郵税 四錢

この著は、元隨感隨筆を蒐録せるに止まり、首尾一貫して見らるべき完璧の歌論にはあらず。然も國歌の内容外形にその眞價を發揮するに勤めたるは、吾人の最も多とする所にして、本著の生命もやがて爰に存すべき也。其研鑽の餘に成りたる文字は、流行に首肯せらるゝ處少からず。歴代の歌、三個の自然詩人、新古今の壓卷、近代の歌人の評等、先は吾人の意を得たるものなり。然れども、其放言漫語に至つては未だし、新派の或者の項の如き、ま、痛快なる議論なきにあらざれど、所詮論客としての氏は、研究者としての比にあらざると覺ゆ、猶篇中、斯壇の逸話考證の數多列擧せられたる、初心の叢に補益する處、決して些少ならざるべく、獨望をいへば、古きを捨て選擇を嚴にし、一層近世の分を輯載する事はなり、然らば、歌學史編纂の資料に供せむとの著者の本意も、始めて全うすべきに庶幾かるべきか。兎もあれ、常に時勢の進運に冷淡なる國學者の手より、かゝる著述の出版を見たるは、吾人の喜悅に耐へざる所也。(讀賣新聞評)

東京 明治書院 發行



187
159

天
知
歌
集
卷
五